

辺野古通信

第40号 2014年5月9日



4/21 神奈川集会に 220 人参加

発行 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)
沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

日米共同声明 辺野古恒久基地化宣言を弾劾する！

■5/5 の琉球新報に掲載された県民電話世論調査結果(4月下旬実施)によると、普天間基地の辺野古移設を支持する意見は16.6%、「無条件閉鎖・撤去」など県内移設反対が73.6%。昨年12月末の仲井真知事の辺野古埋立申請承認直後の調査結果(反対73.5%)とほぼ同じ結果だ。知事の埋立承認後の1月名護市長選挙の結果を無視しての埋立工事入札強行など安倍政権が強引に既成事実作りを進めているにもかかわらず、また3月の石垣市長選挙、4月の沖縄市長選挙と閣僚級を投入してのテコ入れで自公推薦候補を当選させているにもかかわらず、「県内移設反対」の沖縄世論は変わっていないことが浮き彫りになった。■東村高江では例年なら北部の森林-ヤンバルの希少生物の繁殖期に入る3月から6月まで工事を中断してきたが、今年は3月一杯までオスプレイパッド建設工事を強行、高江集落に最も近いN4地区に2箇所へのりパッドを完成させたという(全部で6箇所建設予定)。沖縄防衛局のずさんな工事が県の赤土防止条例に違反していることも明らかになっている(県が3/27立入り調査)。なお、4/7に、N1の監視テントの番人だった佐久間さんが亡くなられた。私たち

が訪問するといつもにこやかに迎えていただき、高江の状況を説明して下さった。無念。心からご冥福を祈りたい。■4/19に辺野古座込み10周年の海上パレードには名護市民を中心に450人が結集し、辺野古の海の埋立てを許さない決意を改めてアピールした。■同日、与那国島で陸上自衛隊沿岸監視部隊配備に向けた施設の着工式を強行。約90人の住民が抗議行動を展開。小野寺防衛省の車の前に立ちばかり、着工式を遅らせた。国境の島の軍事要塞化が急ピッチで進められようとしている。■4/23オバマが来日、4/25日米共同声明で普天間の「早期移設及び沖縄の基地の統合は、長期的に持続可能な米軍のプレゼンスを確かなものにする」とされた。辺野古の新基地建設=恒久基地化宣言であり、絶対に許すことはできない。集団的自衛権の行使についても支持された、と安倍政権は大はしゃぎだが、共同会見ではオバマは尖閣問題で挑発を繰り返す安倍に向かって諭すように「事態がエスカレーションするのを看過するのは重大な誤りだ」と釘を刺した。■辺野古・高江カンパは累計1,492,152円(5月1日現在)。引続きカンパを！ 郵振 00210-0-2021 沖縄連続講座

京都にも沖縄にも神奈川にも米軍基地はいらない！5.24記念講演へ

5月24日(土) 15時 大和生涯学習支援センター(大和駅下車10分)

◆講演◆大湾宗則さん

(米軍Xバンドレーダー基地反対近畿連絡会世話人)

いま、京都府の北部、経ヶ岬に新たな米軍施設が建設されようとしています。弾道ミサイルを迎え撃つための米軍の移動式のレーダー施設です。北朝鮮や中国のミサイル攻撃を防ぐため、と言いますが、本当にそうでしょうか。建設反対運動の現場からの報告です。(主催・県央共闘会議)



「オール沖縄」と連帯し、アジアの平和をめざす神奈川集会



4/21、かながわ県民センターホールにて「オール沖縄に連帯し、アジアの平和をめざす神奈川集会」が開催され、約 220 人が参加。集会は、東京沖縄県人会の名誉会長であり横浜市内在住の川平朝清さんや鶴見や川崎の沖縄県人会の関係者、平和運動センターなどが実行委員会を作り、準備された。

冒頭、琉球舞踊が披露された後、川平さんの主催者挨拶、沖縄平和運動センター議長の山城博治さん、元沖縄県議会議員・元沖縄自民党県連顧問の仲里利信さんの沖縄報告、鶴見・川崎の県人会など県民各界からの発言が続いた。会場にも県人会の方々が多く詰めかけ、壇上からウチナーグチ（沖縄言葉）も飛び交い、「オール沖縄」にふさわしい集まりになった。終了後の懇親会にも、山城さん、仲里さんを囲んで多くの方が集まり、交流を深めた。

「琉球処分官のよう」と評された安倍政権の露骨な介入と、自民党国会議員、県議、知事の「自発的隸従」が沖縄保守層の分岐を促した。「オール沖縄」にどう向き合うか。問われているのは私たちだ。

山城博治さん講演要旨（文責・編集部）



きょうは仲里利信さんという大先輩とお招きいただき、幅広い沖縄の共闘、幅広い全国の共闘が求められている、そういう思いで来た。名護市長選挙では仲里さんが自民党と決別し、稲嶺さんを支援した。涙が出た。安倍政権は、選挙で選ばれたはずの国会議員、県議会議員、県知事の公約を転換させた。

石破幹事長は秘密保護法に反対する市民を「テロリズムだ」と言ったが、冗談ではない。テロリストはお前たちだ！彼らは、沖縄を再び基地の要塞にして沖縄戦の犠牲を再現させようとしている。あの辺野古の海に 1800m の滑走路を 2 本つくり、軍港を作る。弾薬庫もある。高江に訓練施設もある。最終的にオスプレイが 100 機やってくる。オスプレイは低周波音を鳴り響かせる。100 機のオスプレイが飛び回ったら地獄だ。実際に今、伊江島で昼も夜も飛び回り、悲鳴があがっている。こんなことを許してはいけない。

あの沖縄戦でどんなひどいことがあったか。日本政府は沖縄戦の謝罪をしたか。沖縄国際大学の米軍ヘリ墜落の時に、警察は手も足も出せなかった。10 万人以上がオスプレイノー！を叫んでも配備を強行した。だからゲートに座り込んで普天間基地を封鎖した。国会議員も県議会議員もいた。私たちは辺野古でまたやる。私たちは非暴力で座る。日本政府は刑事特別措置法を発動させると言っている。権力に対抗するには、つながり合って、あきらめないで抗議をする決意を示すことだ。

軍隊は住民を守らない。それが沖縄戦の教訓。軍隊は戦争をするためにある。二度と沖縄を国策によって戦場にさせない。そのために「オール沖縄」で闘うしかない。ことしこの一年、沖縄の未来をかけた闘いになる。11 月の県知事選挙にも勝利する。沖縄は沖縄の未来のためにある。

仲里利信さん講演要旨（文責・編集部）



私はこどもたちにも「嘘をつくな」と言ってきたので、嘘を付けなかった。仲井真知事も国会議員も、ウソつき。自民党本部は元から辺野古推進。その党本部が「県外移設」の西銘恒三郎議員を推薦した。しかし彼はその数ヵ月後に辺野古推進を言い出した。石破さんとは選挙で一緒に回ったが、あんなに右翼だとは知らなかった。

もう私は県議もやめたが、嘘つきをみて、これは潰さないといけないと思い、もう一度立ち上がった。私の背中を押したのは 2007 年の教科書問題の時に一緒に動いた人々。あの時「集団自決に日本軍の関与はなかった」と政府が言い出して教科書の記述を修正させた。これに対し「オール沖縄」で立ち上がり 116000 人の県民大会を成功させた。この時以来「オール沖縄」が定着した。共産党も自民党も、保守も革新もない。闘うべきは米国政府であり、日本政府だ。そうやってきた。この 116000 人に背中を押されてやってきた。

沖縄戦の時には 8 歳だった。南風原町から北部に疎開した。ガマに妹と従妹と 3 人していると日本軍が入ってきたのでガマから出た。こんな経験はもうたくさんだ。今進んでいるのは戦争の準備。1996 年に普天間は 7 年以内の返還で合意した。18 年経ったのに何も変わらない。地位協定の改訂も日米政府は聞く耳を持たない。「沖縄は基地があるから栄えている」というのは誤りだ。復帰時は基地収入が 15% だったのが、いまは 5%。観光客 650 万人で経済効果 4000 億円ある。基地があるゆえにマイナスになっている。北谷町のハンビータウンも返還後に莫大な経済効果があった。那覇副都心もそう。基地はない方が雇用も多い。これから沖縄のために、みなさんの英知を結集いただき、沖縄への理解をいただけたら、私きた甲斐がある。

4.28を考えるシンポジウム—東アジアの中の沖縄/日本



4月27日、東京・文京区民センターにて、「62年目の4.28を考える」シンポジウムが開催され、約150人が参加。実行委員会主催、協賛・九条改憲阻止の会。沖縄講座からも実行委員会に参加・協力した。

このシンポジウムは、昨年の4.28東京—5.18沖縄連続シンポジウム「サンフランシスコ講和条約60+1」の問題意識を引き継ぐ形で、準備された。「+1」には「東アジアの分断の起源を解き放ち新たな1」にすることはできるのか。終わらない占領と植民地主義から始まりのアジアへ」（昨年の5.18シンポのチラシから）という思いが込められていた。

しかしこの一年、「新たな1」が踏み出せたのか。安倍政権のもとで集団的自衛権容認—解釈改憲に向けて、軍事費は拡大し、日米軍事一体化は進み、沖縄の軍事植民地状況は深まっている。そのような中で、改めて沖縄の〈自己決定権〉に向き合い、東アジアの戦後史の中に日沖関係を捉え返し、米軍事戦略に深く規定され、現在まで私たちを拘束し続けている「サンフランシスコ・システム」を超えて沖縄/日本の未来を構想する。そのためのひとつの試みとして、今年の4.27シンポジウムは企画された。



コーディネーターは昨年に引き続きジャーナリストの二木啓孝さん。二木さんは、「安倍政権が相当前のめりになって、軍事強化の方向に進めている」と指摘。「きょうは、東アジアの中の沖縄、そして日本について、沖縄の先端攻防をにらみつつ、沖縄と日本を取り巻く東アジアの情勢はどうなっているのか、腰を落とした形で、このシンポジウムを通してみなさんと一緒に考えたい」と切り出し、3人のパネラーを紹介。シンポジウムは休憩と会場からの質疑も含めて3時間。最後に沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック、九条改憲阻止の会、経産省前脱原発テント、日韓民衆連帯ネットワークからそれぞれアピールを受け閉会した。

シンポジウムの概要

□最初に基調講演に立った川満信一さんは、新川明さんと並ぶかつての「反復帰論」の論客で、元沖縄タイムス記者。川満さんは、70年代の沖縄タイムスの記者時代に那覇軍港で起きた米原潜による放射能汚染問題の経験から語り始め、原発問題と基地問題が、国策による地方の破壊、島共同体の破壊という点で共通点があることを指摘。現在の与那国島の陸上自衛隊配備や竹富町の教科書選択問題、辺野古の基地建設問題、さらに遡って70年代の金武湾CTS基地反対闘争などを例に、「国策によって島の共同体におかしな裂け目が入り、ひび割れが生じるという悲劇」を強調し、「恨みつらみを述べるだけでなく、国家の策略を超える知恵が必要」と述べた上で、「国民国家の擬制を食い破る〈シロアリの思想〉」を提起しました。そして、「大国はエゴイズム同士でぶつってください。そのかわり済州島から琉球諸島、台湾、南沙諸島にかけて非武装地帯という越境憲法を作って対抗しようではないか。」「私たちがこれから向かう世界は、一人ひとりが体制を食い荒らすシロアリになる。国家が高層ビルのようにそびえ立っていても、根っこからシロアリのようには食い荒らしていけば、倒壊する。それがいまの僕の儂い夢です。」と結びました。

□続いて、「韓国からの視点」と題して、日韓・日朝研究者の李泳采（イヨンチェ）さん（惠泉女学院大学）が発言。李さんは現在の東アジアの情勢の特徴を「中国の経済的軍事的台頭と日本の存在感の希薄化、弱体化」と指摘。「私たちは、日本も韓国も、集団的自衛権や戦時作戦権という形で米軍の指揮権を認めざるを得ない、敗北の時代に生きている。」と強調しました。そして「米国は、日本と運命共同体であった朝鮮の一部を分割して統治した。私たちは、日本、韓国、沖縄、別々に米軍基地の問題を考えがちだが、米国にとっては同じ地域のいくつかの作戦基地に過ぎない。朝鮮戦争の後、韓国は戦時国家になり、沖縄と日本は基地国家になっていく。戦時国家と基地国家という形で米軍の東アジア戦略が完成された。米国は、日韓が和解除しないとベトナム戦争を遂行できなかったのも、強制的に和解除させた。それで歴史問題も曖昧にされた。」「現在、日韓の協力なしに北朝鮮や中国と戦争もできないので、オバマが日韓を和解させようとしている。1965年の日韓国交正常化を、もう一度歴史的に検証することが求められている」「朝鮮半島の統一問題、安全保障問題について、どうするのか。日本人自身が答えを出さない限り、日本だけの平和、沖縄だけの平和は難しいのではないかと提起しました。さらに「日本の植民地支配の問題を抜きに、東アジアの島々の戦後の悲劇を理解することは難しい。」と指摘し、「海軍基地が建設されている済州島の江汀は、韓国における辺野古。米軍のアジアリターンは、東アジアの新たな軍事化であり、辺野古も江汀もその象徴。新たな基地を建設して、これから百年先を見据えた東アジア戦略を立てようとしている。」「東京とソウルの政府は、南の島に軍

事施設を置き、海岸に原発施設を置き、住民の犠牲を強要してきた。東アジアで三つの島が、戦争の悲劇を乗り越えて平和の島になる日こそ、東アジアが平和になる日だ。」と結んだ。

□最後に台湾・中国文化研究者の丸川哲史さん(明治大学)が「大陸中国・台湾からの視点」と題して発言。丸川さんは、サンフランシスコ・システムが朝鮮戦争のさなかに成立したことに注意を喚起。「サンフランシスコ講和条約体制は、東アジアの新たな主権の地図をつくらうとした。しかしそのメンバーの中に大陸中国、台湾、北の共和国も、韓国も入っていない。ソ連は条約に加わらなかった。これが東アジアの主権の形として、現在まで私たちを拘束している。」「しかしそれ以前の約束事であるポツダム宣言にはソ連も中国も入っている。東アジア主権という時にどのような地図を描くのか、考えなくてはいけない」と指摘。「朝鮮戦争という例外状況の中で無理やり作られたサンフランシスコ講和体制によって、東アジアの主権状態が拘束されている。国民国家でない地域も含めて、ひとりひとり私たちが「シロアリ」にでもなった気持ちで、東アジア

の主権状態の中に、どのように入っていくのか。このことを考えざるを得ない」と強調しました。また「台湾68年世代一戒厳令下の青春」という本を紹介し、「この転換期における台湾で、保釣運動—尖閣諸島を守れ運動が台湾から発生する。これは台湾における民主化運動の原点。」「沖縄の復帰の前に、保釣運動が最初に始まったのは台湾だった、ということを押さえておきたい。中華民国は日本と国交が存在していたが、「中華民国が日本に対して言うべきことを言っていない。学生である我々が言わなくては、という形で保釣運動が始まった。これによって台湾における民主化の第一歩が始まる。この時の保釣運動の抗議の宛先は、アメリカ大使館だった。これは記憶にとどめたい」と結んだ。

第二部では、琉球独立論と琉球共和社会憲法案、東アジア越境憲法の関係、クリミア問題の東アジアへの影響などの興味深いテーマについて、会場からの質問に答える形で、突っ込んだやりとりが交わされ、最後に、三人の出席者からまとめの発言があり、3時間に渡るシンポジウムは終了した。(第二部の内容は省略。雑誌「情況」掲載予定)

安次富浩さん、山城博治さんからシンポジウムに寄せられたメッセージ

62年目の「4・28」を考えるシンポジウムへの連帯メッセージ-安次富 浩(ハ)基地反対協共同代表)

サンフランシスコ講和条約の締結は、日本の支配層が沖縄を米軍植民地支配体制へと切り捨てた日であり、「昭和天皇メッセージ」を具現化した日です。/昨年の4・28は安倍首相による「主権回復の日」と位置づけつつ、昨年1月末の「オール沖縄」の「建白書」を無視しながら、新たな「琉球処分」に向け舵をきった日といえます。式典最中に「天皇陛下万歳!」と叫ぶことでこの式典の本質が見えます。(中略)/安倍政権は尖閣諸島問題を梃子に「領土ナショナリズム」を煽り立て、マスコミを利用した反中国、嫌中国感情を煽動し、一方で琉球諸島への自衛隊増強をもくろみ、与那国島の自衛隊基地設置、石垣島、宮古島への自衛隊配備増強計画が進行中です。悲惨な沖縄戦を再現するような安倍政権の動きは沖縄がヤマトの中央政権と対峙し、琉球民族としての「自己決定権」の行使に対する軍事力をもって潰しにかかっているといえます。/昨年の12月末に安倍政権の恫喝に屈した仲井真知事が選挙公約である「県外移設」を覆し、沖縄振興策と引き換えに辺野古公有水面埋め立てを承認しました。仲井真知事を許さぬ闘いとして、辺野古公有水面埋め立て取消訴訟を県内675人の原告で提訴し、去る4月16日第1回口頭弁論を成功させました。沖縄県の答弁書には「国は本来、公有水面に対する支配権を有しており、…公有水面の一部について埋め立てを行う権限を有しており、…都道府県知事が承認を行わない場合には、都道府県知事に対する是正の指示、国地方係争処理委員会による審査、国による代執行などで解決される。」と、国の決定には従わなければならないと降服宣言し、埋め立て執行停止申立に関しても「日米両政府は現在、辺野古代替施設建設を唯一の解決案としており、本事業の停止は、同飛行場の固定につながる」と述べるなど、地方自治の権限を放棄しました。仲井真知政の答弁書は戦前の「官制知事」体制の如き呆れた内容でした。(中略)/1月19日の名護市長選挙において、名護市民は琉球処分官、石破自民党幹事長の「名護振興資金500億円」という誘惑にのらず、「海にも陸にも基地は造らせない」稲嶺進市長の再選を勝ち取りました。カネや圧力に屈しない「名護マサー」の勝利であり、これこそがナゴンチュ、ウチナンチュの誇りです。来る11月県知事選に向け、新たな「オール沖縄」つくりから沖縄のアイデンティティ、「自己決定権」を獲得に向け闘い続けます。

4.27 沖縄連帯・東京集会「62年目の4.28を考えるシンポジウム」に寄せて-沖縄平和運動センター山城博治

集会にご参加のみなさんご苦勞様です。戦争の道をひた走る安倍内閣に抗して闘い、また常に沖縄に心を寄せていただいていることに心から敬意を表し感謝を申し上げます。/昨年末に、特定秘密保護法を強行成立させた安倍内閣の暴走は、その後やむどころかまさに「狂気の暴走内閣」となって突き進んでいます。その後、年明けの通常国会では集団的自衛権行使容認に道を開こうとやっきになっています。その無謀を極める憲法解釈が各方面から袋叩きに遭うと、なんと砂川裁判の最高裁判決に容認根拠を見出そうと、あり得ない屁理屈を持ち出してきた(中略)。あまりの陳腐さはそれこそ墓穴を掘る行為であることを願わないわけにはいきませんが、ただ、安倍が、この国をなんとしても「戦争ができる国」につくりかえようと死に物狂いでいることは承知置きしておかなければなりません。(中略)/昨年末に振りおろされた沖縄への暴力はおよそ法治国家にあってはあり得ないことであり許しがたいことです。国会議員団体や県議会議員団体そして県知事に振られた圧力と恫喝はまさに横暴を極める権力の暴力という他はないものでした。それを安倍内閣は沖縄の「理解」を得たとうそぶきました。この人たちにあるのは正義や道理なんかでなく、権力行使としての暴力を言い訳する形があればいいだけということを見事なまでに明らかにしました。そしてその暴力は表向きは、沖縄の自民党とりわけ県選出の国会議員や県議団そして仲井真知事にむけられたものではありませんが、実態としては、沖縄全県民に向けられた恫喝であり暴力でした。さらに言えば、全国民に向けられた暴力であったと認識しなければならない質のものでした。(中略)私たちはそのことを認識しなければならないと思います。だからこそ沖縄の闘いは全国の闘いでもあるのです。/結集された仲間のみなさん。安倍内閣は昨年「4.28」を「日本が主権を回復した日」として政府あげて祝賀しました。子供だましのようなこの屁理屈、奄美や沖縄の切り捨てが主権回復に繋がったというなら、そもそも奄美や沖縄は日本の領土や国民でなかったことになり、両諸島に日本の主権は及ばずよって両諸島は独立させなければならないことになります。(中略)/集会に参加された皆さん。この内閣の実像を暴き出し、全国民に知らしめて、限りなく「破滅の道」を突き進む今日の状況を食い止め、ひいては内閣打倒に繋がる学習の進化と成果をあげていただくこと心から念じない訳にはいきません。/「沖縄の偉才」川満信一氏をお招きした戦闘的シンポジウムの実り多い成果を祈念して連帯のメッセージとさせていただきます。